

自立と自由

千葉県・東京学館高等学校 2年 鈴木 悠介

働く、高校生になってから一度もアルバイトなどをしたことがない私には、この言葉の意味を理解しているかと聞かれると、答えられる自信は正直を言うとなない。私がアルバイトをしていないのは、別に働くのが面倒臭いわけではない。アルバイトをしながら勉強も両立させるといことが、私にはできそうもないというだけだ。しかし、そんな私でも、アルバイトではないが働く体験をして、その意味や意義を身を持って感じたことがある。

中学生の時、私は総合学習の一環で職場体験学習というものをしたことがある。その名の通り、さまざまな職場へ行き、働くことの大切さや自分の力でお金を稼ぐことがどんなに大変なのかを知るためだ。怒られそうな話だが、その時の私は人のやっていることをまねて、手足を動かしていれば仕事は成り立つと考えていた。体験するのはたった3日間なのだ。そんなに難しいことはしないだろうと仕事を甘く見ていた。

当然職場体験1日目、この見通しが間違っていたと思い知らされた。図書館という所はデスクワークが中心ではないのだ。新刊本に汚れを防止するラップのようなビニールを何十、何百冊と手作業で張り付け、カートに載せたそれらの本を本棚に五十音順に入れていくのだ。重い本をカートに載せるだけで汗がふき出してくる。気がつく、この単調な作業のくり返しだけで、4時間以上経っている

ことがわかった。脇で見本を見せると作業していた司書の方は、私と同じ時間で、何倍もこの本の整理を完全に済ませており、1冊も違う場所に入れることはなかった。私が担当した棚は違う所に本が入っていたり、なんとか整理しようと手をかけると、本が2、3冊落ちてくるという有りさまだった。その時、司書の人から言われた一言は、今もよく覚えている。「速く入れるだけ、丁寧にに入れるだけ、これなら誰にだってできる。速く丁寧に、どうやったらいいのか考えなければ。」

この一言を聞いた時、私は自分がどんなに愚かだったかを思い知った。まるで自分の腹の中を見透かされた、いや、そうなのだろう。人の気持ちは隠していても、自然と行動に現れる——司書さんは私が整理した本棚だけでわかったのだ。

次の日から、私は生まれ変わったように仕事に没頭した。前日以上に汗をかき、足を動かし、手を働かせた。あの司書さんは私の様子を見て、驚いたような、喜んでいるような顔をして笑っていた。翌日、私は体験学習を無事に終えた。それと同時に私の中の働くことに対する見方が変わった。

「仕事の意義は何か？」この問いにただ答えるだけなら、大多数の人がこのような答えを出すだろう。「生きるために働くこと」、「お金を稼ぐために働くこと」、「生きがい」、「しなければならないこと」など、答えは人それ

ぞれだろうが、私はこれらの答えが仕事の表面だけを捉えた意見であって、その奥深い所にある根本的な意義、それは「人間の自立」だと私は考える。

前にも書いたが、職場体験学習に行く前の私は手足を動かしていれば仕事は成り立つと思っていた。しかしそれは違った。それは人の身ぶり手ぶりをまねしているだけで働いているとは言えない。それだったらそうするよう指示をプログラミングされ、人間以上に速く仕事を済ませることができるロボットを使えばいい。ロボットとは違い、自分が今何をすべきか、一つの仕事を効率よく済ませられる機械に対して、複雑に頭や体、そして心まで動かせる人間はこれを自分自身で考える力がある。しかし、現実には自分がいったい何をすべきかを考えずに仕事ができないという人もいる。

厚生労働省のデータでは、日本には今現在フリーターが181万人、ニートは62万人いと言われている。また、ニートの増加によって2003年の日本のGDPが0.15パーセント低下したとの試算もあり、重大な社会問題になっている。別に私はこの人たちを否定するわけではない。理由があってフリーターやニートになってしまい苦しんでいる人はたくさんいる。あるいは、職が見つからなくてもがいている人もいる。フリーターやニートは全てが悪いとは私は思わない。ただ理由もなく、仕事に就く機会もあるのにあきらめているという人は許せない。自分の可能性を、失敗を恐れずに試す。それが「自立」に繋がるのだと思う。でも、フリーターやニートといっ

た区別なしに日本人は「自立」に対する意識が外国の人々と比べると低いと感じる。日本人とアメリカ人の間には「自立」に対する考えにいくつか違いがある。決定的に違うのは「お金」に対する考え方だ。

アメリカの高校生も、親からいわゆるお小遣いをもらっている。しかし、親からもらうお金と、自分で稼いだお金は全く違うものとはっきり区別している。

親からもらったお金の使用目的は限定されている。親が使ってはいけないということには使ってはならない、自分の自由のために他人の指図が入るお金は使わないのだ。

言い換えれば、アメリカでは汗水たらして働かなければ自由を手にすることができないということである。働ける歳になったら、日本のニートのように親や家族を頼ることはできない。自由に先行してルールがあるということである。

これに対し、日本の高校生はこの個人主義を誤解しているところがある。誰からももらったお金でももらってしまったら自分のお金で、何に使おうが勝手だ、と考える。そうすると自分の好みは個性になり、それがどんな物よりも勝ると考えがちになるのが私たち日本人だ。

それがやがて甘えになっていき、自分の力で稼ぐことの嬉しさを感じなくなる。自立心を養うことは自分でしなければならないことは自分ですということである。その当たり前のことを、欲や願望によって自分自身で妨げてしまうのだ。働く意味や意義がわからない理由はここにあると思う。

もちろんアルバイトを一度もしたことがない私が言うのだから、今まで私の言ってきたことには間違いもあるかもしれない。しかし、働く意義がわからず、自分の力で仕事することに自信がない人はどこかに甘えがあるのだろう。甘えを捨てて、失敗を恐れず突き進んでみる。こうすれば一人一人の働く意義は見つかるはずだ。何よりも前に、自分でしなければならない。